

努力を積み重ね
フェンシングの名門へ

瑞穂市に広大なキャンパスを構える朝日大学には、13の体育会クラブがあります。過去5回「明治神宮野球大会」に出場した硬式野球部、日本で敵なしと言われる自転車競技部、関西学生ホッケー連盟の1部リーグで常に上位のホッケー部など、目覚ましい活躍ぶり。その中でもフェンシング部は、創部12年目の若いチームながら、昨今大注目を浴びるまでに成長しています。

朝日大学フェンシング部を率いるのは、アトランタとシドニーオリンピックに出場した地元、羽島北高校出身の新井祐子監督と、その後輩にあたる井上裕二監督。部の立ち上げから今日に至るまで多大な努力を積み重ねてきました。

「部の創成というところで、まずは部員集めから」と井上監督。「実績のない大学に高校フェンシング界で名を馳せた学生を呼ぶことは想像以上に大変でした」と苦労を話します。

地道なスカウト活動が功を奏し、一期生は男女合わせて14人が集まりました。晴れて部として体裁を成しましたが、練習メニューやかけ声すらも決まっていなかった。「当初は、私も新井も指導者でありながら、選手としても活動していた頃。学生と一緒に練習メニューを構築していきました」と振り返ります。フェンシング部は、指導者と選手の二人三脚で立ち上がったのです。

巻頭特集

次代のオリンピック選手を育成

名門朝日大学フェンシング部

フランス生まれの剣術、フェンシング。

日本では、太田雄貴選手が北京オリンピックでメダルを獲得し、

注目度が上がりました。

朝日大学にあるフェンシング部は、創部12年目と

まだ若いにもかかわらず、日本代表を多数輩出。

リオデジャネイロ五輪を狙える選手も活躍しています。

「まずは、練習メニューをやってみる。効果が薄いなら、すぐに内容変更」と、何もないところからのスタートは、とにかく必死。「ひたすら上をめざすだけ。目標は明確でした」と続けます。

指導者と部員、ともに無我夢中の日々が続く中で、ひとりの女子部員が大きな成長を遂げました。それが2012年ロンドンオリンピックに出場した、中山セイラさんです。

現在中山さんは、大垣共立銀行フェンシング部に所属。在学中に全日本インカレ2連覇を達成。この偉業



「私生活や心の乱れがあっては、フェンシングは上達しない」と井上監督。規律や自主性の大切さを学生に説き、指導にあたります



が突破口となり、以降フェンシング部では、ほかの選手も次々に頭角を現し、さまざまな大会で輝かしい成績を取るようになりました。無名だった朝日大学は、ついにフェンシングの名門大学と肩を並べるようになるのです。

日本代表を要する期待の新チーム

フェンシングの選手が持つ剣は、フルーレ、エペ、サーブルと3種類にわかれており、種目の名前になっています。フルーレは、試合が「突き」だけで行われ、ポイント対象は胴体のみ。腕を伸ばして剣先を相手

に向けた方が攻撃権が生じ、そこから攻防が始まります。エペは、選手の体すべてがポイント対象。どこを突いてもポイント獲得という明確なルール設定です。サーブルは、「突き」だけでなく、「斬る」ことも攻撃として認められるので、ほかの2種目に比べてよりダイナミックな攻防が展開されます。

日本では、北京、ロンドンの両オリンピックでメダルを獲得した太田雄貴選手がフルーレを選択している。とあって、同種目が人気。競技人口も多いそう。しかし、朝日大学のフェンシング部は、バランスよく3種目の強豪選手がそろっており、大会で好成績を収めています。

昨秋の、第53回全日本学生フェンシング選手権大会（インカレ）では、サーブル女子団体の部において、野村知永選手（1年）、榎本由衣選手（3年）、佐藤和美選手（4年）、田村紀佳選手（4年）のチームが見事優勝。大会史上初の4連覇を達成しました。さらに、田村選手は、同大会サーブル女子個人の部でも2連覇を達成。卒業後もフェンシングを続け、2016年にブラジルのリオデジャネイロで開催されるオリンピックの出場を視野に入れています。また、



フェンシングは、中世のヨーロッパで「身を守る」「名誉を守る」ことを目的として磨かれ、発達してきた剣技です。繊細かつスピーディーなテクニックに魅せられる人が多く、競技化への道を歩みます。1750年に金網のマスクが開発されたことから、危険性が大幅に緩和。ヨーロッパ各地で盛んに競技会が開催されるようになりました。オリンピックでは、第1回近代オリンピック（1896年、アテネ）以来、今日に至るまで毎回正式種目である、伝統ある競技です。（公益社団法人日本フェンシング協会公式サイト参考）

フルーレは、同じく昨秋に行われた関西学生フェンシング選手権大会で男子団体が準優勝。エペ女子団体メンバーも優勝しています。現在のフェンシング部は、4年生が引退し、新チームに移行しました。春には新入部員も入部します。インカレ4連覇のメンバーである榎本選手は、サーブルのチームをまとめる新キャプテンに。昨年5月、中国で行われたフェンシング・ワールドカップの日本代表メンバーにも選ばれています。エペの中野紗希選手（2年）も日本代表に選出。田村選手に続き、新チームからもリオデジャネイロ五輪の舞台に上がるフェンサーが現れる予感がします。

1.試合では選手の素早い動きに対応するため、攻撃判定を電気審判機で表示 2.自主性を重んじる部では、マネージャーを採用していません。道具の片付けや手入は部員自身が行います 3.試合は、「Allez!（アレ）」という開始を意味する主審の声がかかってから始まります 4.井上裕二監督。フェンシング部を率いながら、日本代表のコーチ（サーブル）も務めています。「フェンシングの見どころは、駆け引きによって選手の攻撃と防御がめまぐるしく変わる点。スピーディーでダイナミックな剣術は見る者の心を引きつけます」



立ち上げでの苦労と努力があったからこそ、現在の常勝チームを築くことができました



今年20歳になる中野紗希選手。昨年8月、ハンガリー・ブタペストでの世界選手権ではエペの日本代表として試合に挑みました



田村選手は、日本フェンシング協会が定める国内ランキングで、6位（2013年11月現在）。リオデジャネイロ五輪でのメダル獲得に期待がかかります



昨秋のインカレ、サーブル女子団体が4連覇を達成したメンバー。右から榎本由衣さん（3年）、佐藤和美さん（4年）、野村知永さん（1年）、田村紀佳さん（4年）